

## 【報 告】

## 「渡島大島」日本最大の無人島における環境調査（その1）

実施2007年7月－8月

## 酪農学園大学大学院獣医学研究科「離島の保全医学を研究する UNIT」報告

齊藤 聡、渡邊 秀明、浅川 満彦

(石山通り動物病院、酪農大)

## はじめに

北海道の南端松前町から60km沖合いの日本海に位置する渡島大島は、周囲を断崖で囲まれた人を寄せ付けない

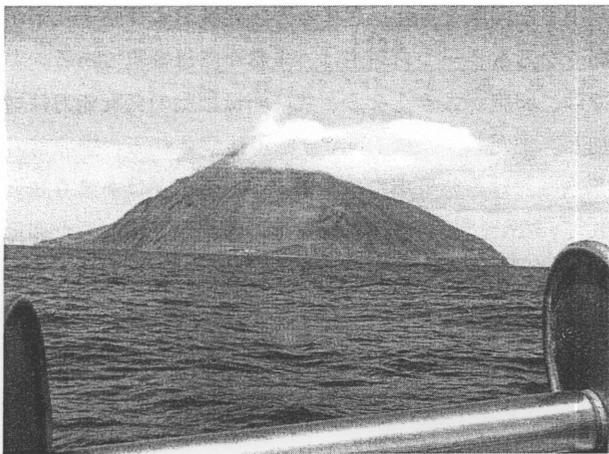


写真1 「船から見た渡島大島全景」江良漁港からは漁船をチャーターしてのみ渡島可能で約3時間を要する。渡島小島を過ぎると海から突き出た山のような島が見え始める。最高峰は732mで海拔では日勝峠とほぼ同じ標高である。

日本最大の無人島である。この島は250年前に大噴火を起こし、北海道沿岸で約1500人も死者を出したランクBにあたる活火山でもある。海底火山が海から空に向かって突き出た、槍先のような形をしているこの島には、河川や湖などの水がまったくなく、また地表は溶岩や火山礫が覆い黒土はない。樹木と呼べるものは無く中低層植物が茂るのみである。



写真3 「漁船から荷揚げする大量の荷物」調査機材や二人分の飲食物など3週間分。

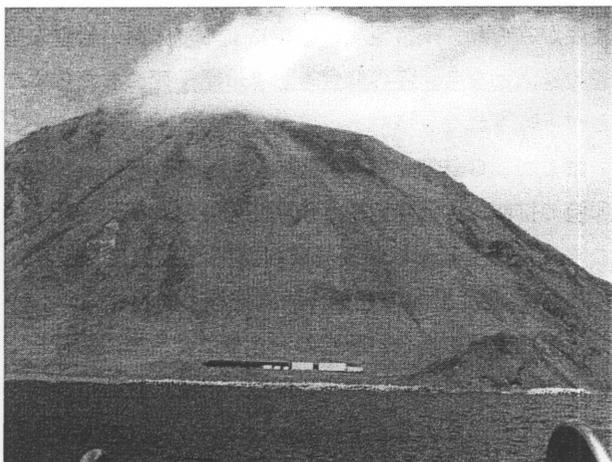


写真2 「一次キャンプ地の北海道開発局の飯場」難破船の緊急避難港を10年かけて建設中であるが現在はまだ使用されていない。

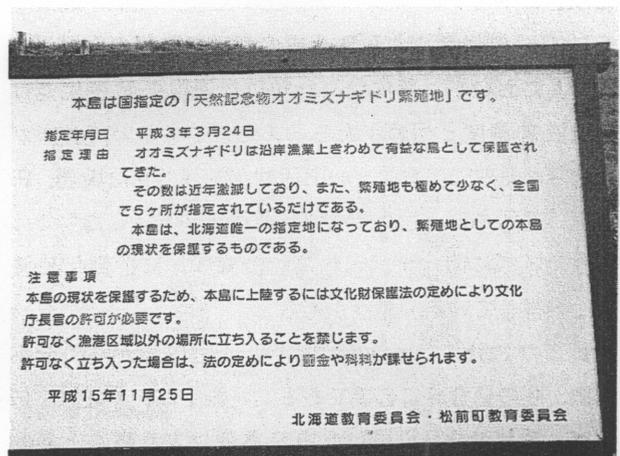


写真4 「島の注意看板」島への上陸許可を得るのは非常に難しい。

現在も井戸や湧き水もなく携帯電話は圏外で、電気も水道もトイレも当然ながらない。訪れる人はなくそれゆえに究極の無人島である。この島はわが国最北端のオオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* の繁殖地で、島全体が天然記念物に指定されており、環境省と文化庁の許可がなければ上陸はできない。今回齊藤、渡邊の2名は絶滅に瀕しているオオミズナギドリの危機を調査し、個体数回復に向けた問題解明と移入動物の実態・疫学調査を研究のテーマとし渡島した。

その 1

オオミズナギドリは日本産ミズナギドリ類中最大で、日本では京都府舞鶴市冠島や、東京都御蔵島で多くが繁殖している。特に冠島では年間数万羽がオーストラリア

方面から春になると渡って来る。過去には渡島大島でも空が暗くなるほどの群来があったと伝承が残っているが、現在では年間百数十羽が渡ってくるに過ぎない。渡島大島は無人島であるがゆえに人工的な要素が少ないことまた、地理学的に、西太平洋最北の繁殖場所として貴重な存在である。なお、オオミズナギドリのRDBランクは絶滅危惧種 (Cr) となっている。

過去の調査により、オオミズナギドリは火山活動や、食用など人による乱獲により減少したとされているが、最近是人により持ち込まれたアナウサギが島の巣穴を占拠することや、ウサギの採食による植物相の変化と巣穴による地形の崩壊、またドブネズミが親鳥や雛、卵など

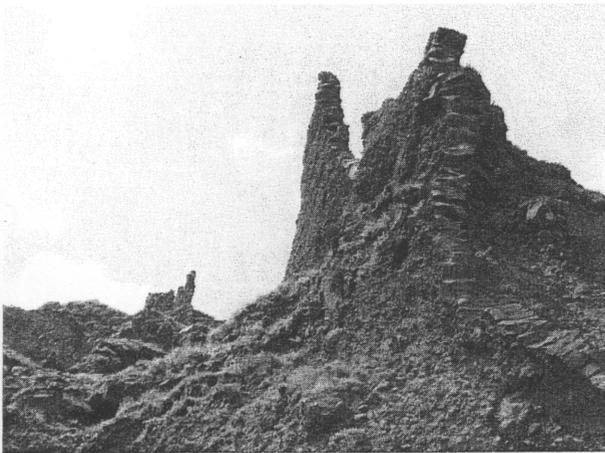


写真5 「島の景色1. 屏風岩」溶岩がゆっくり流れ固まってできた奇岩。



写真7 「渡島大島の植物—ツリガネニンジン」



写真6 「島の景色2. 窓岩」火山性の岩肌になぞかに植物が茂っているが、草が生えていない地表はもろく、降雨により土石流となって崩れ落ちる。アナウサギが掘った裸地がその引き金になっている。

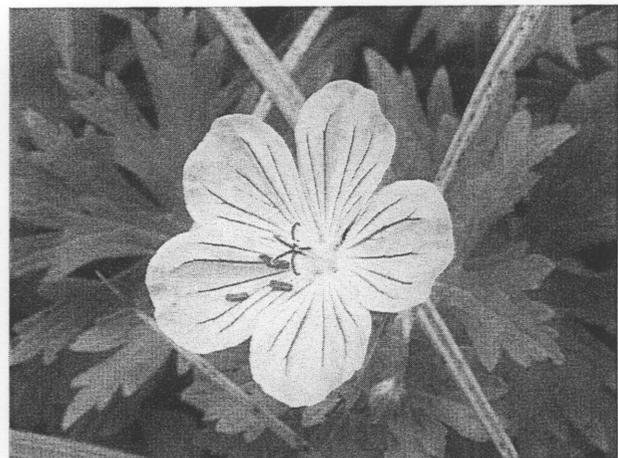


写真8 「渡島大島の植物—ゲンノショウコの花」島には固有の植物はほとんど無く、北海道本島で一般的に見られる植物が多い。

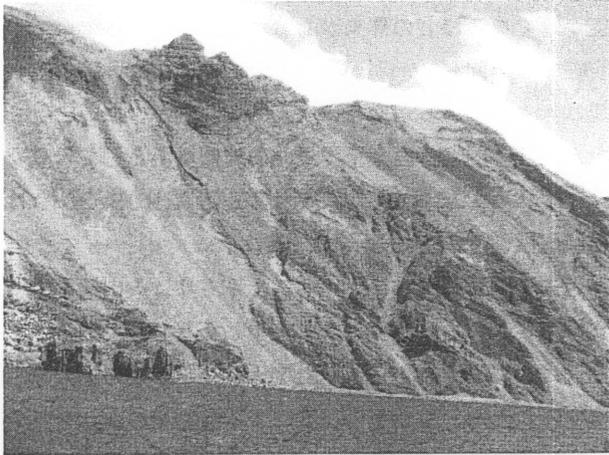


写真9 「海岸線」島周囲の海岸沿いは急な崖になっており、常に落石がありかつ、徒歩で島を一周することは出来ない。

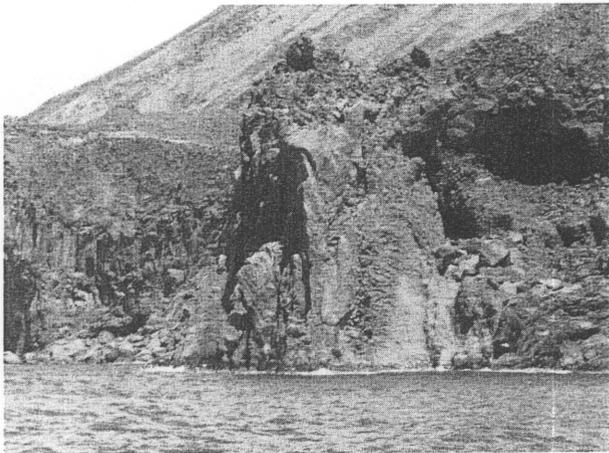


写真10 「弁天岬」断崖絶壁が海底にまで続く荒々しい地形。海岸からわずか50m沖で水深100mに達する対馬海流の中にある。



写真11 「ドブネズミの巣穴」アナウサギの巣穴もドブネズミは利用しているが、本来は入り口が小さい深さ70cmほどの横穴を作る。

を捕食することも繁殖の妨げになっていると報告されている<sup>1)</sup>。

これらのことを踏まえ、島の地形・環境を調査しドブネズミの食性や寄生虫など疫学調査を目的として捕獲を行うこととした。

なお、この島は島自体が天然記念物に指定されており渡航に際し、環境省および文化庁長官の許可を得ている。

その1（前編）では渡島大島についての概要を主に紹介した。後編ではオオミズナギドリ<sup>2)</sup>の営巣地を紹介する。



写真12 「トラップで捕獲したドブネズミ」大きいものは体重400gもあるドブネズミ。越冬した個体は約30%でほとんどが1才未満である。難破船から逃げて島に定住したという説が有力である。



写真13 「ドブネズミの解剖」身体計測後、採血と内臓の検査をし、検査を行うため固定液に入れ生体を含め60個体以上を持ち帰った。